

戦時下における岸田日出刀の建築出版活動について

On Hideto Kishida's Activities concerning Architectural Publication during the War

○川嶋勝¹, 大川三雄², 矢代眞己¹, 田所辰之助²

*Masaru Kawashima¹, Mitsuo Ohkawa², Masaki Yashiro¹, Shinnosuke Tadokoro²

1. はじめに

近代日本の建築運動と建築批評の展開にそって建築誌の系譜が叙述された「建築ジャーナリズム史」では、1930 年以降は「暗い流れ」と位置づけられてきた¹⁾。しかし、「戦前期の建築学叢書の決定版」²⁾や大判の全集などの建築書は活発に刊行されていた。本稿では、1937 年から 1945 年の戦時下における建築出版活動の一考察として、当時のイデオログといえる建築家・岸田日出刀が主導した出版活動を軸に検証する。

2. 戦時以前の活動概要

丹下健三らの師としても知られる岸田の執筆活動は、勝原基貴の集計³⁾によると、雑誌・新聞投稿と図書刊行をあわせて東京帝大卒業後の 1923 年から 36 年に 93 点、1937 年から 45 年に 123 点と、旺盛に展開された。

岸田が出版社の企画・編集にはじめて主体的に取り組んだのは、構成社書房(1929~31 年)においてである。建築運動の性格が色濃い同社の出版活動は、印刷業を営む実業家・猪木卓二の経済支援により成立していた。岸田は、雑誌『建築紀元』(1929~30 年)や写真集『現代建築大観』(1929~31 年)を堀口捨己や今井兼次らと共同で編集し、欧米のモダニズム建築の審美性を視覚的に演出しながら、論文集の性格も併せもたせた編集方針をとっていた。また、岸田の単著となる写真集も刊行され、『過去の構成』(1929 年)では日本の伝統的建築における構成美が、『現代の構成』(1930 年)では国内外の産業建築や土木構造物における機構美が示された。こうした出版活動は、わが国の建築運動体がはじめて一堂に会した新興建築家連盟の結成・瓦解(1930 年)と軌を一にして終焉する。

つづく建築学会誌の臨時増刊号『建築グラフ』(1932~36 年)には、『現代建築大観』の岸田ら編者が移籍するかのようにならざるに参画している⁴⁾。両書には、海外誌から国別に写真を蒐集する共通点を指摘できる。

3. 相模書房における随筆集と監修書

相模書房は、小田原の大綱元・鈴木二六による文化事業として 1936 年に創業された。その編集を一手に担った引頭百合太郎は、平凡社在籍時に百科事典の編集を担当し、その建築欄を執筆した岸田と出会って相模書房でも原稿を依頼したという⁵⁾。その随筆集には、「兼好の建築観」「今日の社会相と建築意匠」(『薈』所収、1937 年)など、建築のありようが一般向けにつづられた。創業当初の相模書房は、小説家の随筆や演劇誌も刊行していたが、岸田の随筆集が好評だったため、建築書に傾注していったとされる。

表 1 は、戦前期に同社から刊行されたおもな建築書である。わが国の出版情勢は、1930 年代後半の戦時下にあっても拡張していたが、1940 年の出版統制により暗転する⁶⁾。しかし、相模書房の建築書は、1940 年以降も岸田の随筆集を軸に刊行点数が増えていった。

その特徴を示す叢書『建築新書』(1941~49 年)は、岸田を筆頭とする 3 名の「監修者の企画に基く」16 巻の刊行を確認できる。発刊趣旨には「講義録的・教科書的・講座的斯種出版物の旧套を脱して「大東亜建設」ための「必携の工具」となることが掲げられており、実用書と教養書をあわせた役割が狙われていたといえる。また、未刊とみられる刊行計画には、『スラブとシャーレン』(坪井善勝)や『新興日本建築』(吉田五十八)など約 100 巻がラインナップされていた⁷⁾。そこには、佐野利器門下による『高等建築学』(1932~35 年、常盤書房)とは一線を画す執筆者の人脈が広く形成され、岸田が建築界のプロデューサーとしての道を歩みはじめていたことも示されている。

こうした単行本や叢書とともに、雑誌『東洋建築』(1937~38 年)が相模書房より刊行された。計 12 号と短命に終わったが、日本の離島や中国大陸を含む文化財や古民家を学術的に探究する独自の編集方針がとられている。各号は論文を軸とする 50 頁前後の本文に、

1: 日大短大・教員・建築 2: 日大理工・教員・建築

16 頁のグラビアと建築学者が撮った表紙写真によって「東洋建築」の審美性が視覚的に表された。

同誌において岸田の名が確認できるのは、表紙の写真撮影だけである。しかし、視覚性と学術性を併せもった誌面構成は、『建築紀元』誌との共通性を指摘できる。また、『過去の構成』が相模書房から 1938 年に再版されている。日本の伝統的建築の解釈を建築設計の方法論に結びつけようとする岸田の姿勢を勝原は指摘したが³⁾、その特徴が両社における出版活動にも示されている。つまり岸田は、1930 年代後半以降も建築の審美性のありかたを一貫して刊行物で表現していたといえる。その旗印を欧米のモダニズムから「東亜」の伝統的建築へと移行させたことで、戦時下においても建築出版活動を精力的に展開しえたとも考えられる。

4. 日本工作文化連盟と雑誌『現代建築』

分散された建築運動体が 1936 年に再結集した日本工作文化連盟は、岸田の「音頭で組織されていた」⁸⁾。その機関誌『現代建築』(1939~40 年)は、論文頁と視覚的な作品紹介が主体とされ、「戦後の建築ジャーナリズムの一種の母型」⁹⁾とも評される。同誌の編集は、ベテラン編集者の濱松義雄のもと、市浦健を中心に岸田の後輩や教え子が参画し、計 15 号が刊行された。発行元の現代建築社は、ほかに刊行物がなく、連盟と同住所ゆえに、連盟内の出版部門と考えられる。

『現代建築』誌でおもな課題とされたのは、「大東亜」における建築の記念性と都市計画、そして海外輸出のための工芸であった。とくに国家的な行事となった忠霊塔設計競技(1939~40 年)では、モダニストたちの期待に応えられなかった審査員・岸田を擁護する姿勢が示されており、「岸田の意向を反映させたようなところのある雑誌」⁸⁾ともいわれる。また、出版統制による同誌の廃刊後に「後継誌」とされた『工作文化』(日本工作文化連盟編、1941 年)は、岸田の主導する相模書房から刊行された。よって同連盟と相模書房の出版活動には、岸田を蝶番とした連続性が認められる。

5. まとめ

『建築紀元』『東洋建築』『現代建築』の 3 誌には、これまで相互関係が見出されてこなかったが、岸田日出刀と相模書房の建築出版活動を軸とした連続性が確認できた。そこに、図集の視覚性と論文集の学術性を併せもった建築家主導による編集方針の共通性も見出せた。それは、建築の審美性を探究する実質的な建築運動が、その舞台となる出版社という場を移しながら、

戦時下も連綿と継続されていたことを示している。

こうした活動における岸田の役割は、同世代の建築家たちとの共同編集、出版企画のプロデュース、後学と同調者との相互支援へと変遷し、展開されていた。それは、モダニズムが戦後建築界の主流をなすことになる移行過程の一側面が、戦時下における岸田の建築出版活動に示されているとも考えられる。

表 1 戦前期における相模書房のおもな建築書

1937 年	雑誌『東洋建築』(1937 年 4 月~1938 年 3 月、通巻 12 号)、岸田日出刀『覺』、藤島亥治郎『匠人談義』
1938 年	岸田日出刀『過去の構成』(再版)、岸田日出刀『聖』
1939 年	佐藤武夫『無双窓』
1940 年	蔵田周忠『陸屋根』、岸田日出刀・土浦亀城『熱河遺跡』、藤島亥治郎『琉璃塔』
1941 年	佐藤武夫『武者窓』、田辺泰『冠木門』、日本工作文化連盟編『工作文化——近代工作文化特集』、今和次郎『草屋根』、伊藤正文『国民学校』①、平岡正夫『工場の建築』②
1942 年	澤島英太郎・吉永義信『二條城』④、関野克『日本住宅小史』③、岸田日出刀『扉』、田辺泰『日本建築の性格』、蔵田周忠『ブルーノ・タウト』⑤、田辺平学『ドイツ——防空・科学・国民生活』、内田祥文『建築と火災』⑥、西山卯三『住宅問題』⑦
1943 年	田辺平学『空と国』、岸田日出刀『ナチス独逸の建築』⑧、剣持勇『規格家具』⑨、M.S.ブリッグス『建築工匠史』(田辺泰訳)、今和次郎『日本の民家』(改稿)、河村五朗『戦線・民家』、山本祐弘『樺太アイヌの住居』⑩、市浦健『住宅の平面計画』⑪
1944 年	星野昌一『防空と偽装』⑫*
1945 年	中村伸『セメント代用土』⑬*、岸田日出刀『建築学者伊東忠太』*

*は出版統制による「乾元社」名義の刊行。

丸数字は叢書『建築新書』(監修：岸田日出刀、田辺平学、田辺泰)の巻数を示し、戦後は凶師嘉彦『工具寄宿舎』⑭*(1945 年 11 月)、竹内芳太郎『帰農者住居』⑮(1948 年)、中村伸『瓦』⑯(1949 年)が確認できる。

註

- 1) 宮内嘉久「日本の建築運動 1920-60」(『世界建築全集 9 近代』所収、平凡社、1961 年) ほか
- 2) 内田祥哉による『高等建築学』の評(『日本建築辞彙〔新訂〕』中央公論美術出版社、2011 年)
- 3) 勝原基貴『大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念に関する研究』日本大学博士論文、2016 年
- 4) 1935 年 4 月創刊の雑誌『建築知識』は、岸田が佐藤武夫、田辺泰、谷口吉郎、藤島亥治郎とともに顧問を務め、創刊前の「賛助員」に伊東忠太ら計 43 名に加わった。しかし、専従編集者の濱松義雄や発行人・田中一が存在などから、岸田の主導と考えにくい。
- 5) 同社 OB 小川格への聞き取り調査(2017 年 1 月 19 日)による。
- 6) 日本書籍出版協会編・刊『日本出版百年史年表』1968 年
- 7) 表 1『建築と火災』『樺太アイヌの住居』などの社告による。
- 8) 井上章一『アート・キッシュ・ジャパネスク』青土社、1987 年
- 9) 宮内嘉久『少数派建築論』井上書院、1974 年